

バルバトスが伊吹の顔にフェイスペイントを書いている間、伊吹は細い筆の感触をくすぐったいと思っていた。
目を閉じた状態で顔を動かすと言われていたが、細い筆が自分の肌の上を撫でる感触がどうしても我慢できず、伊吹はフルフルと体を震わせた。

「やはりくすぐったいですか？」

「うん。」

伊吹の返事にバルバトスは軽く微笑むとフェイスペイントを書く作業を続けた。

「初めてだとどうしても慣れというのがないですからね。そう言えば伊吹は元々感受性が豊かな方ですか？」

「感受性？」

「はい。」

「感受性というか、元々肌の感触には敏感な方かもしれない。ちょっと触られるとすごくくすぐったいし、着る服も肌触りが良いのじゃないと嫌。」

「なるほど、感受性というよりは皮膚感覚が鋭い方なのかもしれませんね。」

「そうなの？」

「ええ。皮膚感覚の鋭い方はどうしても今のあなたのようにフェイスペインティングをくすぐったがりますね。」

「バルバトスさんは陛下と私以外にもフェイスペイントをしたことがあるの？」

「ええ。かなり昔の話ですが友人にフェイスペイントをやっていたことがありました。確かその時も金運上昇などのおまじないを頼まれたような気がしています。・・・ちょっと動かないで下さいね。」

そう言ってバルバトスは横を向いている伊吹のあごに指を添えると筆を動かした。

「・・・完成しました。いかがでしょう？」

そう言ってバルバトスが渡した手鏡を見ると伊吹は驚いたように目を見開いた。

鏡の中には植物のつたをモチーフにしたフェイスペイントで飾られた伊吹の姿があった。

「凄くかっこいい！これ本当におまじないのフェイスペイントなの？！」

「ええそうですよ。」

バルバトスにはこやかな笑顔で道具類を片付けながら言葉を続けた。

「効果が現れるのも早く、大体5分後にはおまじないの効果が発揮されます。」

「おまじないの効果、発揮するのが早いとどの位かかるの？」

「それは、もう完成してすぐですね。」

「じゃあ、このおまじないは金運のおまじないだからーこのフェイスペイ・・・。」

伊吹はソファから立ち上がると、一瞬自分の周りがぐらっと回ったような気分になった。

「・・・あれ？」

「どうしました？」

ぐらぐらと視界が回りつつも伊吹の視界には心配そうな顔でこちらを見るバルバトスの顔があった。

「・・・目が・・・ぐらぐらする・・・。」

「それはいけませんね。」

伊吹がフラフラしながら立っていると、バルバトスは伊吹の体をお姫様抱っこで抱えた。

「少し私の部屋で休まれて下さい。」

伊吹はバルバトスに抱きかかえられたままわずかに口角が上がるバルバトスの顔を見たような気がした。